

79.12.29-80.1.6 冬山合宿（八海山）

道標山の会として行われたこの合宿は、すでにヒマラヤでもアルパインスタイルの山行が行われていたにもかかわらず、あえて極地法的なスタイルを採ったのが理解できなかった。

八海山の頂上周辺の偵察のために何回も通ったのが、スリルがあって楽しかった。また、下山ルート間違えて沢に下ってしまい、ビショビショになり大勢でテントの中で座って一夜を過ごしたが、仲間が大勢いるとこんなにも心強いものかと思った記憶がある。



八海山
正月合宿

79年12月29日

80年 1月 4日

(はじめに) 今合宿は、三山を目標とし、今年度最大の課題として、是が非でも、成功させなければならぬものとされていた。しかし、この夏以降、中堅会員の実動減少があり、加えて当初から予定されていたリーダーも変更を強いられた。

こうした状況で、本格的準備に着手できたのは極めておそく、11月下旬からであった。具体的な計画の策定にあたっては、数少ないメンバーの総力を結集して、成果をあげていくことに、大きな目標を置いた。そこで、八海山だけの縦走にしぼり、しかも全員で縦走するという形式を採用した。準備の過程で、二、三の不参加者も出るなど、あわただしい中で、出発の日を迎えた。

(編成) C1飯沼武近、S L・医務係角田哲、斉藤英夫、久我健二、記録係小俣文夫、記録係本田恵三、会計係矢島俊一

気象係宮本雅江、装備係田中隆、装備係井出宗通、食糧係新井正美

12月29日(晴)

一、宮本雅江、田中隆、井出宗通

(行動内容) 多数の見送りを受け、長岡の列車で上野を出発する。六日町で下車し、ただちにタクシーで大崎口の里宮近くまで入る。里宮のわきで、明るくなるまでツェルトを出して仮眠し、荷物整理の後、行動を開始する。明け方の冷えこみは厳しかったが、周辺に積雪はみられなかった。

霊泉小屋を過ぎるあたりから、積雪があらわれスバツをつける。やがて、ワカンをつけ、ひざ下ぐらいのラッセルとなる。三十キロを越える荷物のため、徐々にきついラッセルとなってくる。日中は春のように暖かく、とても正月とは思えない状態であった。

大倉口の分岐点より、やや手前の幅広い尾根上にC1を設営する。全員ががんばった結果、ほぼ計画とおりの行動ができた。

(タイム) 上野22・11六日町3・40大崎口里宮4・00(7・45) 霊泉小屋

10・15 C I 14・30

12月30日(みぞれ後晴)

(編成) L飯沼武近、小俣文夫、矢島俊一、宮本雅江、田中隆、井出宗通

(行動内容) 計画どおり、三名はC2まで、残りの三名はC1へもどるという予定で出発する。このため、前日より大分軽い荷物となった。出発時は降っていないが、やがてみぞれまじりの降雪となり、視界も悪くなってきた。高度が増すにつれてラッセルも深くなり、順番に交代しながら進む。女人堂小屋付近で、数名の下山パーティーとすれ違い、いくらか楽になる。尾根どおしのルートから、最後、沢の上部をトラバースするようにして、薬師岳へ出る。まもなく、ガスの中に、千本檜小屋が突然あらわれ、予想より、早く到着する。小屋のすぐ上に、C2を設営する。やがて、天候も回復してきた。設営後、小俣、宮本、井出の三名は空身でC1までもどった。

(タイム) C18・10女人堂10・15 C212・00

(飯沼武近記)

12月31日(晴後風雪)

後 発 A 隊

(編成) L角田哲、久我健二、新井正美
(行動内容) 上越線の車中では、寝込んでしまいい下車駅を乗り越すという、のんびりした後発A隊の入山振りであった。五日町より大崎口里宮までのアプローチは、タクシーで消化した。里宮より歩き始めるが、例年なら初めからラッセルというところだろうが、今日は、雪は、あるものの非常に少く、とても冬の八海山とは思えない。道の傾斜は、概して緩やかである。ゆつくりと登っていくが霊泉小屋の手前付近より雪の量は、増して来た。しかし本隊のトレースもありスパッツは、必要ない。天候も良く大変のんびりとした雰囲気だ。民家や地肌を見せている田畑を見下ろしつつ登っていくと、四合五勺のC1手前でサポート隊と合流した。C1で小休止の後、行動を再開するが、この頃より不調の新井は、遅れ気味となった。降り始めていた雪は、少しずつ増し、女人堂の手前で吹雪となった。ここで今までザックに入れるままとついていた装備を出し身仕度を整えた。漸く

冬山らしくなつたと思つたが、降り積もる雪にトレースが消されてしまいかけている。女人堂を過ぎ、薬師岳への登りに掛る頃には、積雪も大分増し、吹雪も強まる一方である。薬師岳直下では、新井は、バテバテで行動は遅々として進まず時間のみが過ぎるといふ状況になつた。このため新井は、空身となり、漸く薬師岳を越えC2に着いた。

(タイム) 五日町6・57(7・10)
里宮7・35 霊泉小屋9・15(9・35)
C111・45(12・15) C215・15

(新井正美記)

(注) C2泊の飯沼、矢島、田中はC1へ下り、C1泊の小俣、宮本、井出と合流。小俣、田中、井出は、残物資とともにC2へ先に向かい、飯沼、矢島、宮本は後発隊のサポートを行った。C2は九名となつた。

1月1日(曇後雪)

八海山偵察隊

(編成) L角田哲、小俣文夫、矢島俊

一、田中隆、

(行動内容) 大日岳まで往復。重荷で全員、縦走するのはかなり困難という、結果であつた。

後発サポート隊

(編成) L飯沼武近、久我健二、宮本雅江、新井正美、井出宗通

(行動内容) 偵察隊が出発した後、天幕の内外を整理し出発する。入山者が増え、トレースもはつきりしてきた。C1まで下り、何度かトランシーバー交信を試みたが応答がないので、メモを残してC2へもどる。女人堂小屋付近で交信したところ、後発B隊から応答があり、四合目付近にすることが確認できた。このため、久我、新井、井出は、ここから再度サポートに下り、C1を撤収し、B隊をC2まで今日中に上げることにした。
(タイム) C210・30 C112・15
(13・30) C215・50

後 発 B 隊

(編成) L斉藤英夫、本田恵三

(行動内容) 夜行で行く予定が、手連れから、朝たちとなる。C1の下でサポート隊と合流、C2の指示に基づき、C1を徹収し、C2へ向かう。

女人堂小屋の下で、C2からサポートに下ってきた矢島、田中と合流し、計七名となる。しかし、ここで新井が動かなくなり、ツェルトを張って暖かい食物を与えるなどの処置をとる。一時間以上、休んだ後、女人堂小屋まで、かつぎ上げるようにして、登る。小屋に本田をつけて残し、夜のC2へ向かった。

1月2日(快晴)

後 発 隊

(編成) L本田恵三 新井正美

(行動内容) 女人堂より快晴の下、C2のある千本楯目指して登っていく。前日のトレースは、大部分残っている。雪はよく締まっていて助かる。途中、沢を数回渡りながら登っていくと薬師岳へ到着した。展望は、良く開け、上越の山々がよく見渡せる。ここよりC2のある千本楯までは、わずかである。

(タイム) 女人堂6・00 薬師岳7
・10 C27・15

(新井正美記)

八 海 山 偵 察 隊

(編成) L飯沼武近、斉藤英夫、久我健二、角田哲、本田恵三、宮本雅江、田中隆、井出宗通

(行動内容) 結果のとおり、好天が予想されたが、前日八時すぎまで行動していた者もいたため、縦走を断念した。後発B隊も加え、前日に続いている八海山偵察に向かう。三本のザイルを駆使し、セット、回収と効率的な行動ができ、前日より短時間で大日岳に到達した。二日連続のトレースで、縦走に対する条件もかなりよくなってきた。なお、小俣、矢島、新井はC2に残留した。

(タイム) C28・45 大日岳10・30 C211・50

(飯沼武近記)

下 山 隊

(編成) L斉藤英夫、久我健二、本田

恵三、新井正美

(行動内容) 八海山縦走をする本隊と別れ往路を下山する。朝からの日射しと暖かさで雪は、大部柔らかくなっている。下山にはそれ程ビッチが上がらないのだが、とにかく周囲がすっかり暗くなったころ、霊泉小屋へ着いた。

(タイム) C213・30 女人堂14・20 (14・40) C2跡15・40 (16・00) 霊泉小屋17・00

(新井正美記)

1月3日(曇)

本 隊

(編成) L角田哲、小俣文夫、矢島俊一、宮本雅江、田中隆、井出宗通

(行動内容) 前夜より天気が悪く、風が強い。アタック予定日ではあったが、停滞に変更。有志で、鐘のある岩峰を越えた次の岩峰まで足を延ばし、お茶のできそうな頃を見はからって戻る。その後、若手はイグルー作りの実習、ロートルはテントの中で作戦会議、きれいな夕焼けで締めくくられた一日だった。(宮本雅江記)

下山隊

(行動内容) 雪は、わずかしかないが、ぬかって滑り易い道を下れば、一ピッチで里宮である。ここより車道を少々歩けば社務所で、タクシーを呼び五日町へ出た。

(タイム) 霊泉小屋 7・00 里宮 7・55 (8・05) 八海山社務所 8・30
(新井正美記)

1月4日(晴後雨)

(編成) L 飯沼武近、角田哲、小俣文夫、矢島俊一、宮本雅江、田中隆、井出宗通

(行動内容) 三時に起床し、徹収、パッキングをすませ、夜が明けきるのを待ち、住みなれた千本檜小屋の幕営地を出発した。

角田、小俣が先行してザイルをセットしながら、八ツ峰の岩峰を越えて行く。連日の偵察の成果があり、スムーズなルート工作が行われた。三時間程度で八ツ峰を通過し、入道岳で最初の休憩をとる。天気はしだいに悪くなり、大粒の雪

が降りだした。

五竜岳に着くころには、全く視界はきかなくなつた。このため、阿寺山へのルートを誤まつて、広堀川へ下りかけ、一たん五竜岳へもどつた。

しだいに雪は雨に変わつてきた。阿寺山の直前から、広堀川よりトラバースして林道に出るルートをとることにした。数年前の経験者の記憶に頼つて、ルートを選んで下つたが、東へ行きすぎ、広堀川源頭の沢の中へ入つてしまった。日没も迫り、沢の中の台地を見つけ、幕営する。全員びしょぬれの上、幕営地が狭くテントの中で座つたまま、一夜を明かした。

読図の結果、部落から約三キロメートル上流の地点で、下流に岩記号の箇所があることが判明した。

(タイム) 出発 6・45 入道岳 10・30 五竜岳 11・30 幕営地 16・45

1月5日(曇後晴)

(行動内容) 出発するころ、ようやく雨はあがつた。前日同様に、角田、小俣が先行してルート工作やラッセルを行つた。出発してまもなく、左岸を高まきし

て、岩記号の箇所を通過し、渡渉を数回行くと、待望の林道が見えてきた。

(タイム) 出発 9・45 広堀 14・00 (14・30) 六日町 15・00

(おわりに) 今合宿の最大の目標としていた八海山の全員による縦走は、達成された。この点については、満足するとともに大きな成果といつてよいであろう。

しかし、反省すべき点も少くない。その一つは、今合宿の意図がメンバー全員に十分浸透していなかつたことである。リーダー陣と若手の間に、落差が大きかつたことである。準備期間が短かつたのも一因であるが、今回の合宿だけでは、カバーしきれないものが大きかつた。近年、今回のような形式の山行が少なくなつていたことにもよるであろう。

新人総仕上げ、五月合宿、また次期正月合宿と続いていくが、これらを一連のものとして、指導体制を確立していく必要がある。これが今回の合宿で得た、今後への教訓である。今後の各リーダーの方は、強力なリーダーシップを発揮されることを特に願ひする。

(飯沼武近記)